

Title	西洋経済古書解題 一千八百十六年版ジエーン・マーセツト夫人著 経済学に関する会話
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1946
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.39, No.6 (1946. 12) ,p.415(39)- 424(48)
JaLC DOI	10.14991/001.19461201-0039
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19461201-0039

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

- (2) E. Gothein, *WG. d. Schwarzwaldes*. Bd. 1. 1892. S. 622. J. Laible, *G. d. Stadt Konstanz*. 1896. S. 56-7.
- (3) W. Grau, *Antisemitismus im späten MA*. 1894. S. 194 ff.
- (4) G. v. Below, *Territorium u. Stadt*. 2. Aufl. 1923. S. 23.
- (5) J. D. W. v. Winterbach, *G. d. Stadt Rothenburg o. T.* Hrsg. v. R. Albrecht. 1905. S. 48 f.
- (6) Eberda. S. 61.
- (7) E. Hamm, *D. dt. Stadt im MA*. 1935. S. 166.
- (8) J. Strieder, *Zur Genesis d. modernen Kapitalismus*. 2. Aufl. 1935. S. 25.
- (9) H. Meyer, *D. Strassburger Goldschmiedezunft*. 1881. S. 185.
- (10) J. Strieder, *Jacob Fugger d. Reiche*. 1926. S. 139.
- (11) L. Feuchtwanger, *G. d. sozialen Politik u. d. Armenwesens im Zeitalter d. Reformation*. I. Schmollers *Jb.* Jg. 32. (1908). S. 1425.
- (12) Vgl. J. Hasegawa, *Staat u. Kirche vor d. Reformation*. 1931. S. 226-8, 405-7.
- (13) J. Strieder, *D. reiche Augsburg*. Hrsg. v. H. F. Deininger. 1938. S. 3, 41.
- (14) G. v. d. Ropp, *Kaufmannsleben z. Zt. d. Hanse*. 1907. S. 6 ff.
- (15) G. Ritter, *D. geschichtl. Bedeutung d. dt. Humanismus*. *Hist. Zeitschrift*. Bd. 127. (1923).

(一六四六・一〇・一五稿)

西洋經濟古書解題

一千八百十六年版ジェーン・マーセット夫人著『經濟學に關する會話』

高橋 誠 一郎

女流經濟學者と稱せらる可き人は甚だ稀少である。其の少い婦人經濟學者の一人にジェーン・マーセット夫人 (Mrs. Jane Marcet) がある。ジャン・バチヤスト・セイは「經濟學に關する著述を行つて男子にすら卓越せるものと認められた唯一の婦人」として彼の女を稱揚してゐる。

マーセット夫人はアントニ・フランスマス・ハルデ、マンド (Anthony Francis Haldimand) の一人娘として一千七百六十九年に生れた。ハルデ、マンドは倫敦に居留して居つた富裕なる瑞西人である。彼の女は一千七百九十九年十二月四日、年二十九にして刀圭界の俊秀醫學博士アレクサンダー・マーセットと結婚した。新郎はデュネーヴ生れであつて、新婦よりも一歳の年長であつた。夫人は一千八百〇六年『化學に關する會話』(Conversations on Chemistry, intended more especially for the Female Sex.) を出版した。化學入門書である。ローリー (Lowry)

の圖版が挿入されてゐる。當時化學に關する小學童蒙の書は殆んど全く存して居なかつたので、本書は頗る好評を博し、一千八百十三年、十七年、二十四年と次々次に版を重ね、五十三年には第十六版を發兌した。此の年に至る迄に、北米合衆國に於いては十六萬部が賣り盡されたと言ふことである。次いで吾人が茲に紹介しようとする『經濟學に關する會話』(Conversations on Political Economy; in which the elements of that science are familiarly explained)が一千八百十六年に現れることとなつた。著者の名は記されてゐないで、唯だ『化學に關する會話』の著者によつて」と著されてゐる。印刷者は倫敦印刷者街(ロンドン)のストラハン(A. Strahan)、出版者は主の祈町のロングマン(Longman)、ハースト(Hurst)、リース(Rees)、オーム(Orme)及びブラウン(Brown)である。小形八折判、前附十二頁、本文索引共四百六十四頁から成るものである。此の書も亦、一千八百十七年、二十一年、二十四年と續々と版を重ね、三十九年には第七版を出した。

著者が本書を草するに當つて依據する所の特に多かつたものは、アダム・スミス、マルサス、セー及びシスモンデ等の著書である(Ibid, ed. 1816, p. vii)。此の書は獨創的な何者をも含有することを公言するものではないが、而も、古典的經濟理論の完成を見たるデーヴィッド・リカードオの『經濟原理』出版直前の時期に一般に行はれて居つた主要經濟學說の單純且つ非論争的な記述として興味あるものである。本書は「ピイ夫人」と若い「カロライン」

對話體で記されてゐる。

カロラインは經濟學に對して一種の反感を有するものである。彼女の女を以つて觀れば、經濟學は税關、貿易、租税、獎勵金、密輸出入、紙幣、地金委員會等の欠伸の種である最も興味のない問題に關するものである。彼女の女は一日穀物の問題に關して或る知識を得ようとして、常に襟を正して殆んど宗教的尊崇を以つて其の名を口にせらるゝアダム・スミスの經濟學に關する著書を繙いたのであるが、不可解なる名辭から成る譯の分らぬ譚語に我慢がしきれなくなつて、僅かにさつと數頁に目を通した後、失望して其の書を抛ち、恥づ可き無識の状態で自分の麵麩を食はうと決心したのである(pp. 5-6)。而も、ピイ夫人は之に對して、經濟學に關する全くの無識から起る誤謬を指摘し、其の原理に關する知識から生ずる利益を縷説する。經濟の學は日常生活の出來事と直結せられ、而して此の點に於いて化學、星學又は電氣學と著しく相違する。吾人が後の諸學に於いて陥ることある可き誤謬は吾人の所業の上に殆んど全く知覺せられる結果を有することを得ないが、前者に關する吾人の無識は重大なる實際的誤謬に吾人を導くものである(pp. 9-10)。

經濟學の本質に關して明確なる觀念を體得しようとしたならば、吾人は唯だ家族の經濟に關する吾人の觀念を全人——國民の其れに擴張するを要するのみである。經濟學は諸國民の富及び繁榮の諸原因を探求することを吾人に教へる科學である。ピイ夫人は社會の發生及び進歩を説き、經濟學を以つて本質的に歴史の上に——君主、戰役、陰謀の歴史ではなく、技術、交易、發見、文明の歴史の上に基礎づけられてゐるものと觀る(p. 20)。經濟學は理論と

實際、學と術の兩部分から成る。理論に於ける誤謬は實行に於ける錯誤を生ずる (p. 21)。夫人は又、經濟學と道義との問題に觸れ、相手のカロラインが富の觀念に於いて誤解を有するに非ざるかを疑ひ、富を以つて效用、便益若しくは奢侈のあらゆる物件を包含するものと説いて聞かせる (pp. 22-25)。混亂は貨幣によつて富を見積る一般の常習から生じたのである (pp. 28)。

第一及び第二會話を以つて緒論を終つた著者は、第三及び第四會話に於いて財産を論ずる。セー流の經濟學三分法は未だ本書に於いては適用されてゐない。労働は富の自然的且つ直接的原因たるの觀がある。然しながら、財産に對して保證を與へ得る底の政府の樹立によつて其の利益が擴張せられる迄は、それは生活の必需品以上のものを殆んど生産することがないであらう。財産權が確立するに至つて勤勞の精神は急速に發達せしめられることとなり、一箇人の餘利収益は他の者の其れに對して交換せられることとなる。斯くして物々交換に對して提供せられた便宜は自から分勞又は分業を誘致し、軀がて又、機械の發明を惹起することとなる。マーセットは第五會話に於いて、アダム・スミスより長文の引用を行つて分勞論を展開せしめる。

第六及び第七會話は資本論に充てられる。財産の安全及び分勞によつて幸福なる結果を生じた時代からして又、貧富の區別が生ずることとなつた。カロラインは是を以つて繪畫の暗黒面であり、麥と共に發芽した雜草であると觀る。然しながら、ピイ夫人は斯くの如き區別が害悪と稱せられ得る所以を知らざるものである。斯くの如きものが野蠻状態に於いて存在することがないとするならば、それは貧窮が普遍的であるからである。文明が生じた時、分勞か

ら生じつゝある利益は勤勉なる熟練者をして其の欲望を満足するに足る以上の富を取得することを得せしめる。單に日常の生計を取得するに過ぎざる勤勉の程度劣れる者は依然として貧窮若しくは無一物の状態に残存する (pp. 82-83)。夫人に従へば、貧富兩者は相互に取つて必要なるものである。それは恰も腹と手足の寓話である。富者がなければ、貧者は餓死するであらうし、貧者がなければ、富者は自己の生計を營むが爲めに労働するの已むなきに至らなければならぬ。労働者の使用によつて再生産の用に充てられた富が「資本」と呼ばれる (p. 88)。次いで、夫人は固定資本と流動資本の區別を明かにし (p. 102)、兩者が等しく労働階級に有利なることを論ずる。資本の存する所に於いては、貧民は常に仕事を看出す可きである (p. 109)。彼の女は、労働階級以上に、機械の如き肉體的労働を節約する過程の導入によつて大なる便益を受ける社會階級はないと思惟した。蓋し、財貨の低廉に最も多く關心を有するものは彼等なるが故である (pp. 110)。固定資本の増加が労働階級に及ぼす影響に關してジョン・バートン (John Barton) の「労働階級の狀態に影響する諸事情に對する考察」(Observations on the Circumstances which influence the Condition of the Labouring Classes of Society) が深甚なる示唆を經濟學者に與へたのは本書出版の翌十七年のことであつた。(昭和十三年版拙著『經濟學史』上卷三七七-九頁参照)。夫人は、資本を以て將來の生産を容易ならしめるに資するあらゆる蓄積せられた収益であると定義し得るものと考へる。而して、一國の資本は其の全住民の總財産から成るものである (p. 113)。

三

第八及び第九に於いては賃銀及び人口に關する會話が行はれる。夫人は、賃銀率を以つて、資本が其の國の人口中の勞働しつゝある部分に對して有する割合に基くものと觀た。而して、そは又、他の言葉を以つてすれば、生存資料が是れを以つて維持せらる可き人民の數に對する割合に據るものと解釋せられたのである (pp. 117-118)。小資本は勞働に對する小需要、低賃銀を、又、資本家には大利潤を齎す。資本の増加は勞働に對するより大なる需要、より高き賃銀を、又、資本家にはより小なる利潤を齎す。然しながら、賃銀率は資本の絶對量に依存せずして、之れに依つて維持せらる可き人民の數に對して相對的なる其の量に依存することを忘れてはならぬ。華國に於いては、資本大にして賃銀低く、西米利加に在つては、資本小にして賃銀高い (pp. 116-137)。貧窮は人口に對する自然的抑制である。大人口は豊富から生じつゝある際に於いてのみ有利である (p. 141)。第十會話は貧民の狀態に就いて取り交される。第十一會話に於いては収入が論ぜられる。夫人は先づ、収入若しくは所得を生ずるが爲めに資本を使用し得可き種々なる方法を擧示し、而して、其の何れが最も有利であるかは其の國の狀態に従つて相違する旨を説く。資本の使用から取得せられる利潤は總べてに於いて平等に歸せんとするの傾向がある (p. 182)。利潤は又、危險の程度に比例する (p. 185)。夫人は最後に其の平等を攪亂する種々なる事情を説明する (p. 188)。第十二は、土地所有權から生ずる収入に關するものである。リカードオの『原理』出版の以前に上梓せられた本書中に於ける地代論が彼れの其れと

酷似してゐることは、彼れが穀物問題に關して一千八百十五年に著した其の小冊子『資本の利潤に較ぼす低廉なる價格の影響に關する一論』(An Essay on the Influence of a low Price of Corn on the Profits of Stock) の影響によることを示すものである。農業に在つては、土地を購入する資本と之れを耕作する資本との兩者が使用せられ、而して、一は土地の所有者に、他は其の耕作者に歸する別箇の二収入が生ぜしめらるゝが故に、夫人は第十三會話に於いて土地耕作より生ずる収入を論ずる。第十四に、自ら其の資本を使用せざる者の収入が話題となる。吾人は夫人の利子論に於いて、恰も賃子が土地に對する賃子なるが如く利子は資本に對する賃子であると做したダッドリ・ノース流の思想の傳統を認めることが出来る。

第十五會話は價值及び價格に關するものである。著者は一貨物の價值を以つて地代、利潤及び賃銀の三部分より構成せらるゝものと觀る (p. 278)。價值の本質を明かにしたる著者は進んで第十六及び十七に於いて貨幣を檢討する。之に次いで第十八には商業、第十九及び二十には外國貿易が取扱はれてゐる。最後の第二十一會話では、収入が如何に費されるかの問題が論ぜられる。奢侈に關する論議が其の重要部分を成してゐる。

四

此の書は夙にリカードオの注意を惹いた。彼れは一千八百十七年三月九日附マルカス宛の書翰中に次の如く述べてゐる。『マーセット夫人は直ちに第二版を公にするであらう。小生は彼女の女の書の若干の章句に關する小生の意見を彼

の女に寄せ、而して、貴下が小生と論争せらるゝであらうことを小生のよく知つてゐるものを指摘した。彼の女が我れ等の論議に耳を傾けたならば、彼の女の書の印刷は長く遅延せられるであらう。彼の女は寧ろ之を避けて、中立的立場に立つて其の進行を續く可きであらう。小生は我れ等がカロリー嬢を傷ましう困惑せしむ可きことを信する。而して小生はデイ夫人自身が此の難件を明瞭ならしめることを得るか如何かを疑ふ」と。(Letters of David Ricardo, to Thomas Robert Malthus 1810-1823, ed. James Bonar, 1887, pp. 132-133.)

此の書の示唆によつて、ハリエット・マーチノー嬢 (Harriet Martineau) は一千八百三十二年から三十四年に互つて其の『經濟學の解説』(Illustrations of Political Economy.) を公した。マーチノーは其の著の中では、マーチノーの書に負ふ所のあつた言を特に記してはゐないが、其の『自傳』(Harriet-Martineau's Autobiography, with Memorials, by Maria Weston Chapman, 1877.) には「或る隣人が私のシスターにマーセット夫人の『經濟學に關する會話』を貸して呉れたのは一千八百二十七年の秋であつたと思ふ。私は主として經濟學が正さに何であるかを知るが爲めに此の書を取り上げたのである。(中略)。全科學の諸原理が社會生活の精選せられた事件に於ける其の自然的作用に於いて表示せらるるを得可きであると云ふ念が忽然として私の心に浮んだ。(中略)。斯くの如き意見及び意圖は私がマーセット夫人の『會話』を讀んだ時に始まる」と記してゐる (ibid., val. I, sect. 3.)。一千八百三十三年寛大な態度を以つてマーチノーの努力の成功を認めたマーセット夫人は彼の女と親しく交るに至つた。

マーセットは本書出版の後、Conversations on Natural Philosophy, 1819. (此の著は二十四年、二十七年と相次いで版を重ね、著者の生前五十八年に第十三版を出し、更らに其の死後、令息王立協會會員フランスマス・マーセット (Francis Marcet) の註第十四版を世に出した) Conversations on Vegetable Physiology, 1829. Stories for Young Children (The Seasons), 1832. Mary's Grammar, 1835. Willy's Holidays, or Conversations on different kinds of Governments, 1836. Conversations for Children on Land and Water, 1838. Conversations on the History of England for Children, 1842. Game of Grammar, 1842. Conversations on Language for Children 1844. Lessons on Animals, Vegetables, and Minerals, 1844. Mother's First Book-Reading made Easy 1845. Willy's Grammar, 1845. Willy's Travels on the Railroad, 1847. Mrs. M.'s Story-book, 1858. 等々出つた。其の經濟學關係のものは一千八百三十三年に發せられた『ジョン・ホプキンスの經濟學に關する概念』(John Hopkins's Notions on Political Economy.) 及び一千八百五十一年に出版せられた『富と貧』(Rich and Poor, Dialogues on a few of the first principles of Political Economy.) の二著である。

マーセット夫人は一千八百三十二年十月十九日其の良人を失つて後、長く其の文筆の生涯を續け、一千八百五十八年六月二十八日、八十九の高齡を以つてピッカデリリ・ストラットン街なる其の女婿エドワード・ロミリ (Edward Romilly) の邸宅で歿した。

セーは「女性も亦、彼れ等が家族の繁榮に著しく良好なる影響を及ぼすことを豫定せられた研究の一部門に適しな」と信するのは自己を侮辱するものであることを認め出した。一人の淑女(マーセット夫人)が英文で『經濟學に關

する會話』なる一書を公にし、佛語にも翻譯せられたが、其の中には極めて確固たる諸原理が極めて快い文體で表明せられてゐる」と此の書に就いて述べてゐる。(Jean-Baptiste Say, Traité d'économie politique, sixième éd., par Horace Say, 1841, p. 39.) 英吉利の文豪ミルトン (Thomas Babington Macaulay) は其の文名を高からしめた『ミルトン論』(Edinburgh Review) 一千八百二十五年八月號所載の「ミルトン論」(Essay on Milton) に於いて「ワーセット夫人の經濟學に關する小對話篇を讀んだあらゆる小女はモンタギュー若しくはウォルポールに財政に關して多くの教訓を與へることが出来るであらう」と言つてゐる。本書によつて經濟學に對する興味を喚起せしめられた第十九世紀前半の若き人々は決して少い數ではなかつたであらう。

マルクスの思想的思想の系譜

平井新

(一)

ゲーテはエッケルマンとの對話の中で、ラファエルに就て、こんな感想を洩してゐる。「如何なる藝術にも親子の關係がある。大家を見れば、必ず彼がその先驅者の長所を利用したこと、まさしく、そのために偉大になつたことがわかる。ラファエルの如き人々は大地から生えるのではない。彼等は古代と彼等の以前に作られた傑作とを基礎としてゐた。彼等はその時代の長所を利用しなかつたら、大したものにはならなかつたろう」と。(1)

マルクスの思想の系譜

思ふ。マルキシズムはその理論に於ても、實踐に於ても今日既に批判に堪へざる幾多の矛盾と缺點とをもつてゐる。それだからと言つて、マルクスの偉大さを疑ふものはあるまい。彼の偉大さはどこから來たか。まさしくマルクスは大地から生えたのではない。實に、彼位「先驅者の長所を利用し」、「古代と彼以前に作られた傑作とを基礎とし」、「その時代の長所を利用し」た人は珍らしい。併し乍ら、既に先在する幾多の長所や傑作から、唯機械的に、より偉大な體系が生れるものとは限らない。吾等の思想を利用し咀嚼し、吸収して自家巢籠中のものとすに足るだけの透徹精銳な頭腦が同時に存立しなければ